

◆連載-Vol.14

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948 神奈川県生まれ。1971年
千葉大学建築学科卒業、『住宅
特集』『新建築』編集長を経て
1994年からフリー編集者。
1999年～2014年千葉大学客
員教授。木の建築フォーラム理事、
日本建築学会建築文化事業委員
会幹事

関東大震災後日談

耐火建築の必要性が環境を変えた？

関東大震災（1923年9月1日）による木造校舎の倒壊や火災によって多くの子どもたちが犠牲になり、これを契機に全国の学校建築の不燃化が進められることになった。

しかし、第二次世界大戦への参戦、戦後のベビーブームによる人口の急増などによってこの作業はなかなか進まず、そのうちに新材を原因とするシックスクールが顕在化し、さらには資源や環境の問題までが絡んで、木造の学校へとシフトし始めたのが現代である。

木造化に反対する理由などないどころか、遅きに失したのではないかと思われるのだが、これまでの学校建築がRC造だったのにはこのような理由が背後にあったことを忘れてはいけない。

幸か不幸か、まだ残っている木造校舎がチラホラ見受けられるが、ほとんどが廃校となっている。2020年に新省エネ基準が施行されたら、こんな木造建築はできなくなる。重要文化財に指定されるまで、何とか今後も生き延びて欲しい木造建築物は枚挙にいとまがない。

一言愚痴を言えば、すでに重要文化財や国宝に指定されている建築物が「既存不適格」となるような法律、あっていいのだろうか？ 日本の伝統的文化に対する暴挙ではないだろうか。文化革命がいかにも多くの文化を破壊したことか。同じ愚挙を繰り返してほしくない祈りのみである。

革新的な都市型集合住居・同潤会アパート

大震災を契機として生まれた建物で注目すべきは同潤会である。全国各地から寄せられた義捐金を基に翌年の1924年に組織され、500棟以上の戸建て木造分譲住宅やRC造の「同潤会アパート」が十数棟建てられた。いずれも都市居住という立脚点がしっかりとっていて、これからの都市生活をイメージして設計された。近隣との関係、ライフスタイル、ライフステージへの対応など、現代でも通用する理想的な集合住宅であった。

そのうちのひとつ、そして同潤会アパートとしては最新モデルの1934年製「江戸川アパート」の末期に5年ほど居候をした。家主はここで生まれ育った大学の先輩であり、建築家の橋本文隆。

現代の一般的なマンションと比較してみると、階段室などの共用部分がいり、世帯向けと単身者用のふたつのタイプが階を別にして用意されていること、大衆浴場、食堂、社

交室（名前が渋い!）、そしてどういうわけか理容室が揃っていたことが大きな特徴である。

残念ながら私がいた頃の大浴場は利用者が少なく、予約制でしかも毎日お湯が沸いているわけではなかったし、社交室が集会所として機能している以外はすべて閉鎖されていた。初めから設置されていたエレベータは戦時中の金属供出で撤去されてしまい、解体されるまで復活することはなかった。

都市居住という視点からみると、けっして広くない世帯向けの部屋ではあったが、子どもはある程度成長したら単身者用に移り住み、スーブの冷めない距離で独立心を養う、そんな提案までが含まれていた。

橋本の言葉によれば、「内の子」と「外の子」を区別していたという。建設当時は賃貸であり、大卒程度のサラリーマンでは入居できるような金額ではない高級アパートであった。佐野利器の弟子で構造家の横山不学や文学者の坪内逍遙などの文化人たちが住んでいた。おそらく周囲は木造平屋かせいぜい2階建ての住宅がひしめいていたに違いないから、青溟をたらしした子どもたちに較べれば、お坊ちゃん、お嬢ちゃんたちの世界であったのだろう。

中庭には樹木が生い茂り、夏でも中庭に入ると2～3℃は気温が低かった。春には中庭中ガマカエルが飛び跳ね、夏は蚊の大群に団扇と蚊取り線香で対抗し、秋には銀杏を拾って酒の肴にし、冬は火鉢と石油ストーブで凌ぐといった長閑な暮らし。なにせ電気容量は建設当時と変わらず10A。冷えたビールは必需品なので冷蔵庫を入れたらエアコンなんて入らない。

もう時効だろうから書いてしまうが、10Aに耐えられず20Aのヒューズに、勝手に変えてしまった。このころはブレーカーなどなく、過電流が流れると熱で溶けて通電を阻止するヒューズという鉛製の線があった。これを電気屋で買ってきて入れ替えたのだ、ある時、定期点検でこれが発覚、こっぴどく怒られてしまった。といっても怒られたのは橋本だが。

退去する頃、外壁が剥離する危険性があって周辺は立ち入り禁止。そして中庭に「禁煙」の立て札が立った。それでもかまわずタバコを吸っていたら管理人が飛んできて、すぐにやめてくださいという。理由を聞いたら、大元のガスメーターの消費量と各戸のメーターを足したものと合わない。だからどこかで漏れているはずだという。即タバコをもみ消した。

超高層が建ち並ぶ新宿区にありながらまったくの別世界で、私の元を訪れたフィンランドの建築家たちは「Jungle Office」と呼んで喜んでた。

フィンランドの応急仮設(?) 住宅

一連の同潤会アパートは震災復興ではあったものの、新しい都市居住のプロトタイプを提案し、それがのちでも評価されている。また、フィンランドには緊急対応のために建設されながら伝統建築群として保存の対象となった集合住宅がある。ヘルシンキ市内にあるカピュラの集合住宅もついでに紹介しておきたい。

1917年、ロシアから独立はしたものの、カレリア地方は返還されず、その住民たちはヘルシンキに殺到した。すでに工業化の波に押されて地方からも続々とヘルシンキに職を求めてくる人々がいた。当時のヘルシンキの人口はおよそ20万人。そのうち1万人分の住居が不足していた。

そこで、早急に、しかも廉価に大量の住宅を供給しなければならなくなったのだが、エベネザー・ハワードの田園都市構想が取り入れられたのである。（ついでながら、同じ構想が1950年から始まるタピオラにも取り入れられている）

カピュラはヘルシンキ市の中心部から北へ5kmの距離であるが、当時では都心から遠すぎるという理由で、路面電車トラムを設置する条件付きで開発の許可がでた。

建設に当たっては、ひとつの住戸に4世帯入る規模を基準

とし、6人の大工が4週間で1棟を建設可能なログハウスの建設システムが開発され採用された。

バス、トイレ、キッチンなどは住居内部ではなく、数棟の住戸によって囲まれた中庭に共同の施設として設けられている。中庭が菜園として用いられたのは、まさに戦後の混乱期の状況を表わしている。そして8年間に538戸、1戸平均1.8室、居住者数約3,000人といわれているが、実数としては1,500人程度だったようだ。戦後の混乱期とはいえ、それでも1室に3人が暮らしていたことになる。

建設時間短縮を最優先されていて、いまで言えば応急仮設住宅である。ところが、1960年に市が建替へのコンペを発表したところ、建築家グループが反対運動を起こし、調査をした結果、構造体がまったく無事であることが確認できて70年に補修計画が発表され、現在でも入居の希望者は後を絶たない。

東北地方太平洋沖地震被災者のための仮設住宅と比較してはいけないだろうか。

ともかく、これで戦前まではひとまず最後としよう。次回からは戦後（おそらく改めて第二次大戦後と言わなければいけない時代となったような気もしているが）に時代を移そう。（続く）



同潤会江戸川アパート解体数年前の写真。小庇はほとんど剥落して、まるでゴーストタウン。手すりが黄色いところに居候していた



同潤会中庭。ちらっと見えるジープは私が15年間愛用した車



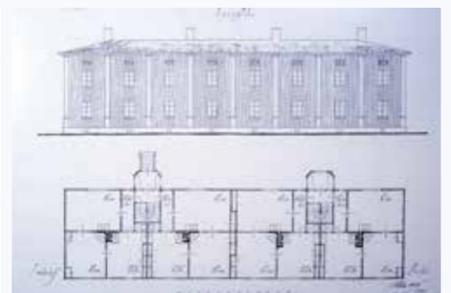
同潤会にて「東京人」で同潤会特集を組んだ時、改装した74号室で橋本文隆（左）、前野まさる（右）との座談会風景。床を剥がして地面にじかにコンクリートを打った。冬は底冷え、夏は蚊に襲われる



カピュラ全体。1920年に建設された、魅力的な町である



通路の反対側は住人たちのコミュニティの場。かつては炊事場、サウナ、トイレなどが設置され、さらに野菜畑であり運動場でもあった



カピュラ建設時の図面類はすべて建築博物館に所蔵され、修復の時の大切な資料となっている